図書紹介（104）

『グリーフケアを身近に—大切な子どもを失った哀しみを抱いて』

安井眞奈美（編）、勉誠出版、2018 年

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

本書が編まれたきっかけは、編者の安井さんがヘレン・ブラウンさんとその著書『クレオ』を知ったことだった。当時天理大学で教えていた安井さんは、家族を亡くした学生さんに、いったいどんな言葉をかけたらよいのかと戸惑うことがあったという。そんな思いを抱いていたときに、出会ったのが『クレオ』だった。そこには交通事故で９歳の息子を亡くした彼女の半生が書かれていた。クレオは息子を亡くしたブラウンさんが飼い始めた猫のことで、家族はクレオと過ごす中で、ゆっくりと日常を取り戻していく。「まだグリーフケアの重要性に気づかれていなかった 1980 年代初頭に、自ら模索しながら道筋をつけていった彼女の物語を、一人でも多くの方がたと一緒に聴いてみたい」と思った安井さんは、2016 年に連続シンポジウムを企画し、仙台、東京、天理でそれを開催した。第１回は「子どもの死を考える」、第２回は「グリーフケアを身近に」、第３回は「出産の場におけるグリーフケアの可能性」をテーマとし、このシンポジウムが、本書の基になっている。

安井さんは本書について、次のように述べる。

「本書は、大切な人を失った人びとの哀しみに、わたしたちはどのように寄り添えばよいのか、また自分自身が大切な人を失ったとき、どのように向き合うのか、その具体的な糸口を示そうとしたものです。宗教学や文化人類学、民俗学などの研究者、産科医療従事者、そして哀しみを抱えた人びとに寄り添う活動をされる方がたなど、幅広い分野のみなさんが参加しています。誰かの哀しみに寄り添う『グリーフケア』を、専門家だけが関わるものではなく、わたしたちが身近に実践できる方法として捉えたいと考えたからです。」

仙台に行った時、仙台空港にあった「ここまで津波がきた」という印にとても驚いたというブラウンさんは、「５年半は多くの人にとっては長い年月です。５年半もあれば、頼りない赤ん坊が読み書きできる子どもに成長しうるほどです。わたしは経験から知っています。予期しない状況で子どもを失った人にとっては、それはまるで時が止まったようなものです。」と、東北の大地震で家族を失った人に思いを寄せる。哀しみは忘れられないものではあるけれども、それでもその癒しの助けになるものがあることを、自らの経験を通して語る。島薗進氏は、自分が大事にしている人がなくなる（失う）ということを考えれば、希望、プライド、生き甲斐などを失ったとき、また原発事故で故郷を失ったということにも、「グリーフ」が起こるとし、「グリーフケア」と「グリーフワーク（喪の仕事）」について様々な活動を紹介しながら述べる。（第１章）

鈴木岩弓氏は、「子どもの死」は子どもにだけ起こるものではなく、誰にでも起こることだとした上で、死者儀礼・人生における通過儀礼やそこにある意味を尋ねる。そして死の問題を考えるときには、「＜死の記憶＞が＜死者の記憶＞へと展開する道をいかに確保するかが重要である。」と述べる。また、波平恵美子さんは『クレオ』のように、哀しみが物語になるのには、長い時間がかかること、哀しみを語ることが重要と述べ、「物語は、油絵を完成させるように、ひと筆ひと筆なぞるように、一人の人が語り始めた物語を、二人目が書き、三人目が書き、何百人、何千人の人が語り継いでいって、初めてそれは子どもの死を乗り越えていくための物語になっていく。」と言う。（第２章）

鈴木由利子さんは、民俗学の立場から妊娠や出産にかかわる意識が変化していると指摘、その上で胎児への意識の変化について述べる。出産の現場が複雑化している現代における「子どものいのち」について考えさせられる。また、佐藤由佳さんは自らの死産の体験を通して、流産や死産からの視点をグリーフケアに与えている。（第３章）

目次は以下の通り（一部略）。

はじめに—哀しみの淵にいる人へかける言葉（安井眞奈美）
子どもの死、胎児の死へのグリーフケアを考える（安井眞奈美）
第１章　哀しみを抱いて生きる
・哀しみの中で物語を紡ぐ—『クレオ—小さな猫と家族の愛の物語』（ヘレン・ブラウン）
・『クレオ』とグリーフケア（話し手：ヘレン・ブラウン　聞き手：安井眞奈美）
［コラム］被災地とヘレンさんを結ぶ（藤澤久民枝）
・グリーフケアの歴史と日本での展開（島薗進）
［ディスカッションⅠ］哀しみを抱きつつ、心を開いて
第２章　子どもの死に向き合う
・子どもの死を考える（鈴木岩弓）
［コラム］グリーフケアとしての通過儀礼（松岡悦子）
・震災で失った子どもとともに（李仁子）
・グリーフケアとして語り（波平恵美子）
［コラム］物語はひと筆ごとに（澤井奈保子）
［ディスカッションⅡ］哀しみを癒やす
第３章　出産の場におけるグリーフケア
・哀しみに寄り添う—民俗学の立場から（鈴木由利子）
・流産・死産に向き合う（佐藤由佳）
［特別寄稿］とこしえの母の愛と双胎の姉妹愛（染谷優美）
・産科医療の現場より（遠藤誠之）
・心に触れる人間関係に根差したグリーフケアを（堀内みどり）
［コラム］出産からみえてくる家族の喪失体験—医療ソーシャルワーカーの立場から（鳥巣佳子）
［ディスカッションⅢ］産科医療におけるグリーフケア
［コラム］連続シンポジウムに参加して—当事者・専門家・メディエーター（中本剛二）
物語を紡ぎ続ける—あとがきにかえて（安井眞奈美）